

センター運営委員の紹介

※2022年度体制（職名は当時のもの）

野崎 大地（のざき だいち）

【所属】 身体教育学コース・教授

【専門分野】 身体教育科学

【センターとの関わり】 2011年度から運営委員として参加し、2016-2017年度にはセンター長も務めました。私自身の関心は、脳神経系によるヒトの身体動作の制御・学習プロセスにあります。研究の対象としては、スポーツや楽器演奏など、ヒトならではの洗練された動作はもちろんですが、身体障害からの機能回復も含まれます。心理的、社会的、文化的なバリアなど多様なバリアを扱う本センターの活動にも影響されながら、身体機能のバリアの問題に取り組んでいきたいと思っています。

斎藤 兆史（さいとう よしふみ）

【所属】 教育内容開発コース・教授

【専門分野】 英語教育、英語文体論

【センターとの関わり】 2020年度より、東京大学教育学部附属中等教育学校長として、運営委員会に参加をさせていただくようになりました。中等学校の校長になってみると、普段の学校生活はもとより、入学を希望するお子さんへの対応などにおいてもバリアフリーやインクルージョンの問題に直面し、この問題が単なる理念ではなく、個々の状況において様々な形を取って現れる事案であることを実感しました。星加良司先生にも、具体的な案件に関するご指導をいただき、教職員ともども多くを学ばせていただきました。今年度は校長職を離れましたが、高度化専攻のメンバーとして引き続き参加させていただき、上記の問題に対する理解を深めることができました。

能智 正博（のうち まさひろ）

【所属】臨床心理学コース・教授

【専門分野】臨床心理学、研究方法論

【センターとの関わり】臨床心理学のなかでも特に、コミュニティのなかにおいて障害をもっている方々をどう支援していくかに関心があります。研究では、障害をもっている方におけるライフストーリーや語り（ナラティブ）について質的な探究を行っています。特に人生途中で脳に損傷を負い、失語症などの高次脳機能障害をもたれた方がどのように自分を立て直し再構築していくか、あるいは語り直していくかが私の研究における重要なテーマです。語りは既にわかっていることを言葉にするだけのものではなく、それによって意味を生みだし、当人にとっての「現実」を創りあげます。バリアに関する語りも例外ではないでしょう。このセンターの運営に関わらせていただきながら、個人の体験する「バリア」についてもう一度考え直し、ひとりひとりの人生の文脈のもとで何が「バリア」となり、どういう実践がそれを変化させていくのか、自分なりに考え直していければと思っています。よろしくお願いします。

東郷 史治（とうごう ふみはる）

【所属】身体教育学コース・准教授

【専門分野】教育生理学、応用健康科学

【センターとの関わり】現在、教育学研究科身体教育学コースに所属し、環境や社会の変化にともない生じる心身問題と、その対応について調査・検討をしているという点で、センターとのつながりがあると考えています。また、センターの誕生に中心的に関わられた武藤芳照名誉教授と衛藤隆名誉教授には、学生時代に、医療、福祉、健康教育の課題としての多様なバリアの存在について学ぶ機会を頂いたということは、私のセンターとの関わりりの原点となっていると思われます。専門分野では、思春期にある中高生、大学生、勤労者、高齢者等のさまざまな年代での心身問題の予防と改善を日常生活の中でどのようにすすめることができるかという課題について、心身や環境のバリアの存在を注意深く捉え認識するとともに、またそうしたバリアの解消を目指すバリアフリーや社会的包摂のあり方を視野に入れながら、検討していきたいと考えています。

額賀 美紗子（ぬかが みさこ）

【所属】 比較教育社会学コース・教授

【専門分野】 教育社会学・比較教育学

【センターとの関わり】 2020年度より運営委員を務めております。私は人種・エスニシティの面でマイノリティになる子どもたちの包摂に関心があり、特に移民背景をもつ子どもとその親たちが受け入れ社会で直面する困難を研究しています。労働力不足を背景に日本でも移民受け入れが急速に進んでいますが、その子どもや親たちのウェルビーイングを支える政策や実践は未だ不十分です。一方、移民の包摂はグローバルな課題であり、移民の歴史が長い先進国では社会的公正の実現に向けた様々な取り組みが行われています。社会の周縁に留め置かれるマイノリティの子どもや親の生活経験をフィールドワークを通じて丹念に見たり、国際比較の視点から検討することで、かれらの困難を生み出す日本社会のバリアを明らかにし、どのように障壁を取り除いていけるかを考えています。また、このセンターと関わりながら、人種やエスニシティがジェンダー、セクシュアリティ、障害、貧困などのマイノリティ性とどのように交差するのかという視点を育み、さまざまな差異が尊重される公正な教育と社会のありかたを考えていきたいと思っております。

山本 義春（やまもと よしはる）

【所属】 身体教育学コース・教授

【専門分野】 教育生理学

【センターとの関わり】 2022年度より、東京大学教育学部附属中等教育学校長として、運営委員会に参加をさせていただいております。附属学校でも、バリアフリーやインクルージョンへの対応の必要性は増大しています。東京大学の「ダイバーシティ&インクルージョン」の標榜と無関係ではないのかも知れませんが、現実の対応は、人的・予算的な制約等から必ずしも容易ではないとの印象です。センターの皆さまには、これまで同様、是非とも本件にご指導、ご援助をいただき、さらには中等教育における「ダイバーシティ&インクルージョン」に向けてお知恵を拝借出来ましたら幸いです。

大塚 類（おおつか るい）

【所属】基礎教育学コース・准教授

【専門分野】臨床教育学・教育哲学

【センターとの関わり】2022年度より運営委員を務めております。私の研究のスタートは、虐待などで保護者と一緒に暮らせなくなった子どもが生活をする児童養護施設でのフィールドワークでした。現在は、公立小学校にボランティアとして毎週入りながら、被虐待・発達障がい・低学力／低学習意欲・優等生の繊細さ・不登校傾向といった「生きづらさ」を抱えている子どもたちの教育やケアの方法について質的研究を行っています。さまざまな意味での「生きづらさ」をキーワードに、幼児から高齢者まで多様なひとびとが少しでも生きやすさを感じながら他者とともに生きていける社会を作るために何ができるのかを、教育哲学の観点から今後も検討していきたいです。

2022年度から開始された「KYOSS（教育学部セイファー・スペース）」ラウンジの設計と、コミュニティとしてのKYOSSの立ち上げ・運営に携わっていることが、私とセンターとの関わりです。2023年現在、KYOSSには30名を超える学生・院生・教職員が所属し、それぞれの興味関心から多様なイベントを実施しています（詳細は、KYOSS公式twitterやinstagramをご確認ください）。こうしたKYOSSの活動を介して、性別・障がいの有無・年齢などさまざまな差異を問わず、「みんなで緩くつながり続ける」かたちでのバリアフリーのあり方について考え続けていきたいです。